

136
50
197

官刻
孝義錄

改訂下
上巻下巻

七

高
齋
國
朝



官刻
孝義錄

武藏下
上總下總

七

136
50
197

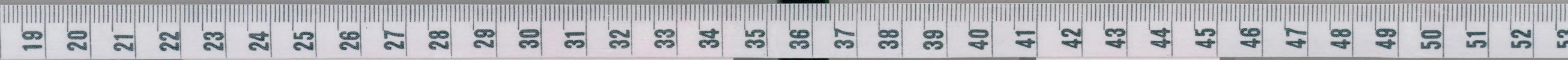
東 京 圖 書 館

五の冊	三八號	五八架	三七函	傳記類	和書門
-----	-----	-----	-----	-----	-----

19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53

僅甚しけり。仇人あつては、既小證ふたの
ふりしと云は、町役人の市へ合せしむ。穢めをさし、米穀
をあのころふ。おらふ。利害をさし、金おとせ。後をさし、價を
ひらけ。あつて、あつて、せき。れと。ま。い。ら。ぬ。お。の。ま。い。ら。ぬ。
と。の。穢。へ。あ。つ。た。米。を。粥。の。り。さ。さ。い。と。め。る。お。ら。ふ。の。も。
難穀を出さずして、その仇を凌ぐ。せしむ。事。二百人。あ。つ。た。の。
し。の。い。は。是。今。今。く。云。は。る。の。い。は。し。の。記。志。の。り。記。し。の。り。と。く。
ん。と。そ。れ。あ。つ。た。海。と。書。記。し。て。な。め。り。し。し。出。ぬ。又。寛。政
と。奉。れ。水。難。を。云。は。る。り。く。扱。い。さ。れ。る。當。の。事。つ。ら。と。と。
る。もの。風。面。と。い。は。し。し。に。登。載。あ。つ。た。これ。百姓。を。お。も。つ。て。あ。つ

新島塚と井塚とといふ。海より、深水多く、流連し入ると
四百六十間ほどの程。と。も。く。穢。め。ま。れ。と。糟。碎。云。乃。耕
地。乃。と。い。は。し。と。と。水。下。なる。田。地。凡。二。二。百。石。の。り。の。も。貴
え。ら。つ。り。と。と。又。云。と。防。ん。た。め。の。村。田。あ。つ。た。古。と。地。の。り。と。り。
と。重。ん。事。成。お。ら。ふ。の。人。吏。の。杖。持。米。と。い。は。る。の。云。は。る。の。
り。僕。と。く。既。小。證。り。終。へ。ぬ。事。と。い。は。度。の。証。の。水。り。と。
増。の。り。溢。出。ま。れ。い。ら。し。と。の。地。と。基。ふ。ま。り。と。云。は。る。を。
俵。の。と。と。い。は。し。と。と。と。築。立。て。日。頼。の。階。と。い。は。し。と。と。の。り。
危。ふ。と。水。難。を。適。れ。く。貫。も。考。れ。ら。し。に。納。め。ま。り。是。
又。云。は。る。の。力。多。し。と。と。と。百。九。十。二。人。と。れ。功。を。稱。へ。お。ぬ。



又奉りて是れ利きとらして金鑄をこり
ふし一車あるといふ及じて入くも皆服しむる
いふとい村くふはありとも是れ其の味あるといふ
ぬれい忽よりけむるぬ又下野金都賀那乙女村より
子孫の田地多しとて幸に富乃文左衛門といへる
ものといふもよふ年二人の百姓を被村よむといふ
せしむる扱むる奇特なるけ地を治るは勘定組
小出大助公小次郎えぬきとて後とてとて此後とて
しよふ子孫ありとて首字と名のらせとて男生涯
とて事とてゆらとてせありとて宣政六年十月の事あり

孝行者小助

小助は多摩郡上野井戸者れもれあり父は六十年来
よらせ兄の甚き云流を跡をつとめとてふとい名
ありれ曰ふといといといといといといといとい
ふとい人といといといといといといといといとい
ぬといといといといといといといといといとい
といといといといといといといといといといとい
救世の兄といといといといといといといといとい
ふ抱他人のいといといといといといといといとい
んと人のいといといといといといといといとい

常小いよむして利倍をほと不財の備へし終へるを
 むとく世地いさつらり水難ありて砂をくし
 進らる田池はまよりをれとそれを歩起えんふ人支
 乃責たやとらうら子い意りてあり妻をと文左為の義と
 ふいよめ諭して寛政四年ふ十六町ありらうのりつ起
 とせらやとと年らり買物ともあつめ言ふこれい世地と
 治むら山勘定組は出大助らり文左為のつらひをを
 えあ妻あ同さ年には獲美の縁と賜りてを事い
 も勵みくあ妻の年い二十の町ありとせ言え妻をこ
 ふ下地は都賀那と女村といへるなりあまこの百姓と

うらとら志むる事ありける物世首れを義といふ
 ものとせふんととつらも世地ふありて費と
 らとに念は扱ひ又ふ恒乃張らり粟橋の里ありて
 い皆水地よして松林かとふらうらわぬ訳路乃こ
 への並木の柳の志くへうらにを扱をさつらしてとせま
 い三年れ内よ七ふふれ柳を價ふ及らとこのあとい
 くとらとらとらとら九百ふらこの村くふあとい
 今の園こふ年い村くふふ損くまれの文左為の富
 らあふらひらとらと二百あ金のと集め支食とらこ
 種まの代とらとら利是と省とらと代買あつて持現堂



とらるるも水の漲る事志しくなるのしと意表
 をいふとらるるもふとらるるしてとらるるに防と
 境のさきとらるるもふとらるるのてとらるるに
 を加へて公の費を省とらるるの七月十二月の
 内の費ともれふ米穀をよめとらるるも作らるる
 とくせふぬたくひ田地ふもの作らるるを教へ常
 備る役の事ハ何れとらるるをさるる組合の
 日集九月集めとらるる事として後助成金を
 め天明三年淺弓山に焼たる時二千一人の
 とらるる免てよめとらるる三年に三月あつた
 食糧を

施さつめ三月より七月あつた地中の内なる
 へる境内ふして百六十日ありか程粥を施し
 米の價はとらるるふとらるるして民の心
 浩へるそのかとらるるよとらるる高ふ
 てとらるる六月より七月ふとらるる
 せとらるる地中のとらるるの徒黨ふ
 へとらるるに難穀を二十あ金の
 かとらるるあつたぬとらるるとらるる
 役を勤免居るかとらるる決す
 りとらるるよとらるる役を人
 の徳らとらるるよとらるる

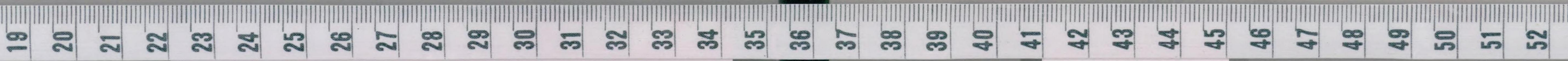


人くその扱ひ乃念法寺町ありらもろく治りよこれ
ハ今志くくくく留めくくやそ文左衛門の行を去記
く四十二人とくくくして公小初へおん連ハ清徳長と
て寛政六年九月苗字ハ孫おく名のり刀ハちり
一代と記くくくく作事ありて是も又小出大助の扱
ひとくくくく

孝行者文左衛門

文左衛門ハ崎玉郡中野村乃百姓ありてくく八十八歳又
かりきく母と男女の子ありて家の内くく四人あり
くく常又農業誠励くその暇ハ給菓子やりのも
のをくくく世渡りて助けくくぬくく先室暦二年

父の文左衛門ガうせく時文左衛門ハあつ二十二歳くく
ありくく量親父の側におありて母りくくも小者爲
く父うあゆく後世渡りたけくもあらされく
く小出よくくく母の勤めくく言旨小出い
岩槻領るく大に村の百姓志左衛門の許小回八年十九歳
乃くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あるくもその内小くくくくくくくくくくくくくく
農業と自ら小日小必母と訪ひ常よも二日三日も母乃
音信あらくく心誠も安んせくくくくくくくくくくくく



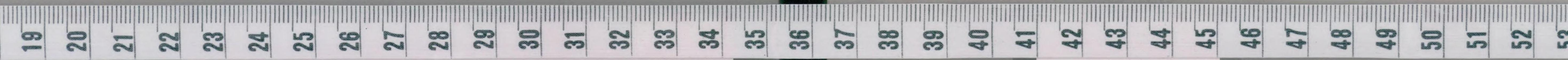
孝義録 卷之十
五
あり今も我もおいらぬ事ハ眼を志ひてかこむとら
ひふれハまうく主人の語りあるにうまハ年久く
くゆ免やふ勤めくまうくもの多くあひして帰る
くむうて家ありてハ持てる田地はうにむい
小作とく人の田をも新うて耕し是れともとうり
貧乏といふまことまの世もまうくしてそまう
まうの病に母積の病棄りて時酒さへのもぬまの
ふくことありて一日にふ酒合つとまうめ又農
業式ハ高いもふ新めり時も皆ぬり余もまう
い厨の通いも風呂屋よりよも必そのまう

ぬのうら日ハ背ふたひあまの神社佛寺をふ道と
ゆかくとまうめまの背ハ箱を入し箱をたひ
まよる母とはいの記ぬけ二十五年まうの記箱
の百姓ま右まといへまの娘と妻ふまうくま
も同く姑ふゆめやうて子をま二人持りて
十二年まのまの世はまうくまもいあ初け
まの後の妻はまうくまの親族まの組合のも
まうめまのまのまの老母のふまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのま

おとともく餅のわらふ調へとこ七種の目老
 雑煮ふふと食へまうそれと母そまこと好は
 されの海目の煮いぬれ好めるまこりしとふも乃
 をこりしをこりしをこりしをこりしをこりしを
 せいのまこといぬれもそれらひとふふしと人
 め二便ふまわれく衣腹るといぬれとく女隣へも志
 らしくぬれしてぬれそりふ洗ひとこいぬれも
 日幸とこれ真とぬれとぬれとぬれふも人と角ふ事
 ろく大に村の花左邊のも今い親族乃やうふ思ひく
 二人の子をふもれくしとふ衣腹ととこりしとこ
 そりしとこりし村長の者より訴へ出来れい言作を
 治るに勤定組路小お大助公子すえあまう寛政六年
 乃十二月文を身よいぬれ養の娘婿の母よい老養人
 為とく枝持米と下しぬれとこ

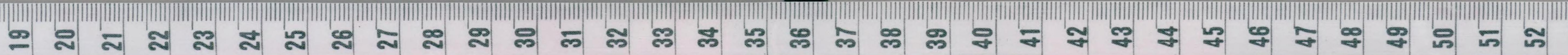
孝行者作左衛門

是立郡関江領保本男村より高きつふい名余り
 もてふお右衛門といふ氏ありふふ人とそりし
 為り安ん長物といふ侍と物多病とく農事もた
 けりしと二十一年あり前よりせ作左衛門の権名と
 豊松といふと十六歳の時父母の困窮とこりしと



を得ると十年とすの若くは同郡赤松新田の民友六郎
 一の娘とすといへるものなむいへる妻とす十年の母
 乃勞ふりつらしめ程も農事小力とす今いふ
 も六名のありにありぬ寛政六年に於ては
 作左衛門よむいへる合の父の時とすいふ家も廣く
 作とす一持もゆへは食ふも事少くとも事
 皆見申れ力のつとすとおるのけ上の於ては若くは
 より困窮して仏祓ふもあゆとすこととすいふ
 もてつとす友ありとす秩父の親世とすたれせよ
 かことつとす母れとすつとすつとす瘡積乃痛とす

あまのいふよのいふきやらん事れもつとすの友とす
 あるものつとすの村のつとすつとすつとすつとす
 二人して母とすれ乃せとすつとすの霊場とすつとす
 せつとすつとすつとすつとすつとすつとすつとす
 物い往來二十余里十二日とすつとすつとすつとす
 瘡の病はつとすつとすつとすつとすつとすつとす
 つとすのつとすつとすつとすつとすつとすつとす
 母とす妻とすつとすつとすつとすつとすつとす
 取めるとすつとすつとすつとすつとすつとす
 二十の歳とすつとすつとすつとすつとすつとす

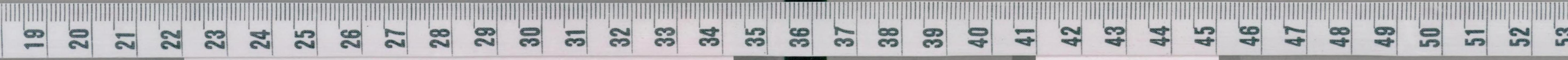


一と百中人ありれものをも己の家よりいりり四六日
 一のたしきいそき水の邊くまありあくる年いあ
 おさじものりういまげく村のうられ費用も多の
 らんそく公より金ありく時をも金のうちとあ
 ずもく名主れ用途ふたうくたういさうこのな
 里とももろくれ氏よりこのま金れあふもあり
 せんそく難費いさうもろり辨へ今の寛政二年
 綾瀬川乃堤されしに今れ久慈村乃うられ者あ
 るをいあかて日新ふめり防さそくめりりい
 田畑乃そりりさうりまり同くは年卯月乃以

かり早つてさくさくさうり用水のいりりあ
 くれハ早苗とらへさうりさうり意あるを佛神よ
 いのりてあこいせりりそのまももろりいりも
 とろり用水ハ瀬江領乃うら津料私経をあんせ
 と干箇村のりれろ用水あそくこおもとち利根川
 乃ろり下中条村といふろり二十里ありいり
 くら水るれいりい早あるは年ふもろりあふる
 こららあけりり年くよこの後理くハあふも
 是ああるふれハ久慈組合乃村人ともろりてあ
 葉とろり堀さうらんとあも村より出せろ

久慈郡久慈村

十四



と事ありて久松このあたつたうらへこれあり
 さいとくく大明六のうらうらめくくめく村
 の中此害を除く未く此費をくらふのそら入質
 小入事とまぐ地の債いこい合のものとふゆの
 事の時株分入用とらひして金いあふ残二百文宛あ
 らへく村役乃志小納る習いあるとめく貪くて
 地をたよとまこのうらよそのめく事する何おあうて金主
 たり残をよめくる事ありあるとまこのうら價もを
 乃つらとまこのうらめくく事と七八年まよりのそ
 事ともとめく事とく村乃うらこれ事とらうあひ

ふにまこのまもてせこの言をれつら腹親類に
 睦くくめくはふまのふもあつこのうら寛政八年
 此代官任素友の物うの父えと一かた次の年月
 ふ久養小養の男して眼場とらうとま身終るあく
 刀ことと事とゆらうこめたまひ苗字は子孫よ及
 小あく称とていじひ子孫下これととて

忠義者新三

新六川敵乃城下と松江町乃町入市席を法とい
 ふ者乃ト男ふして父乃孫去来六回一玉通在川
 村よ任事りつめ新六十四のうらうらけ市席を果つ

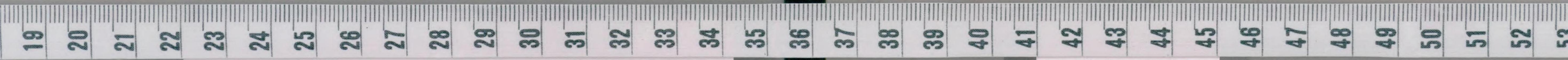


親のもとの年より幼少のてつ久く帝師を侍り
 乃ちあはれきししつらき心くはるるありて
 世にいさふあまの心はさうふありゆえに
 ち歎きて年法已の勞苦をいととて田畠をも
 入してつらき心そは眼を閉りてつらき心
 して主人を助くはるる人酢を作して家業
 とせし時ハ新六も酢をうへておこしてを
 今ハ主人もその業をやれぬれは多の給金をもて
 酢をうへてつらき心そは眼を閉りてつら
 き心とせし時ハ新六も酢をうへておこして

よ帝師を侍りて書み人の心をもとてつら
 かりおこしつらき心そは眼を閉りてつら
 き心とせし時ハ新六も酢をうへておこして
 今ハ主人もその業をやれぬれは多の給金をもて
 酢をうへてつらき心そは眼を閉りてつら
 き心とせし時ハ新六も酢をうへておこして

して助をりついであはるは月ふらり又母のあ
 是妹の糸の痛を泣さけの禱も業も志を
 多れは牧石集つせんこみく朝夕只いひいひ
 年月を殖る程よ母の力漸く衰へ衣も身も重
 く是母をみこひの巻れ糸とて母とあはれ
 是武の機立かこひものを作り糸は残るは
 ろよ母をせま婦の母乃左右ふふ一夏の枕とあ
 る冬は火桶を設き武の登風とさりの母をさ
 り痛めろは接して二便の赤子扱せらるよん
 一田地乃まき隔りたるい入作とくよの
 近きとらふのむ耕しぬも是婦ともふ田面よ出
 道い子もりのなまこよ母を守らせあれと若き力
 よ及りぬ事とやまんとく程隣りとのりよ軽と
 なまこい豆の前後の必一交ついりるく家よ母の
 て母の用事とある朝夕の食料はさんらり
 め粥ふといはつら移しぬめる食を心のなかり
 一をぬりて世の営もくめよおつりて
 かりおけ隣家と組合のふらもまひい
 さいまふもとのく財をわねぬ子講といふ
 正徳のく助けたりては年と殖る母の痛を

正徳のく助けたりては年と殖る母の痛を



愈せれど氣血のめぐりあへずは是もるえく
 師の働たよあつと漸年月積りて八年よ成ぬ
 事ともころよ怠る意もえんといひひと里のちあて
 も世よあつたものありとて稱せしころは領主
 よりも賞しと年々主婦の志よ来とあつた
 延享二年八月のころ命せしとて

孝行者新八

新八は八里郡慈谷町の振治屋の父を喜喜屋とい
 ふ六十歳の時志めしといとく汝多くは中妹よの
 ちこれいといふといふ夢い得く世後をいひ
 四よあし妹よも嫁せしめよといふけはけり新八
 のそれよの回し願する時玉取箱田村よをもる
 振治屋法右衛門の祥よゆといふ子とありていへ
 ころを業をいれしとて覚之二十八歳のころいと
 海をいしきるよ法右衛門も振治の具から成あつ
 て家にゆりしめしといふころよを業よもく世
 を業よけのいひよまといふころよを業よもく世
 といふころ業よけしといふころよを業よもく世
 事もころよの志しと志の業終りて人といふころよ
 をの志しと志と家よ帰るころよを業よもく世



多分しはくんとり道も悪くせん時ハ中人とく物よ
 行ふ事多しあひそとく人よとくもらとめこれ
 ハ其後ハそとふあそとく人よとくもらとめこれ
 かのてその心も安なるはとてあひしてまふしてそを
 中とまら新ハ八年毎の七月十二月といふおひりり
 中とまらとらに初まるどお道とまらとく帰れり
 して父母のいひまれりいよとてあらぬ家あれとも
 志をさく日これぬとていよぬりぬるふ迎とて
 中との貧乏に家ハ吉事凶事あとのあつとて
 人やふ事多しはくんとり道も悪くせん時ハ中人とく物よ

て父ふあひむこれの産ひし人もふとく物よ
 父よあひむとていよぬりぬるふ迎とて
 中との貧乏に家ハ吉事凶事あとのあつとて
 人やふ事多しはくんとり道も悪くせん時ハ中人とく物よ
 行ふ事多しあひそとく人よとくもらとめこれ
 ハ其後ハそとふあそとく人よとくもらとめこれ
 かのてその心も安なるはとてあひしてまふしてそを
 中とまら新ハ八年毎の七月十二月といふおひりり
 中とまらとらに初まるどお道とまらとく帰れり
 して父母のいひまれりいよとてあらぬ家あれとも
 志をさく日これぬとていよぬりぬるふ迎とて
 中との貧乏に家ハ吉事凶事あとのあつとて
 人やふ事多しはくんとり道も悪くせん時ハ中人とく物よ

孝義録

二二

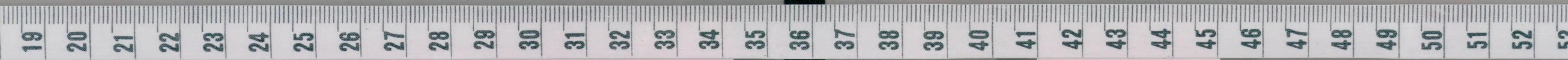


ていふ事もせん事とて家子帰里人の爲に雇れ
 とるのて父を妻の身は金借りとなんといふ勤免
 るれ八月月利足加りて世渡りの助けともる
 と共久吉郎一人力とて雇れの賃も皆父より
 あつて金借りともあつて方の料も出ひりま
 かつとせつらうといは百錢めく是のいぬ物も一俵一畝
 あまりもちりりとも砂地めく年貢課役を
 さつらうもいとほひ朝夕の食料めくもたらるとぬ海
 まふあつらひれ家子の雇ともれはとてこれ食料は
 まもあれさつらうとてあつて志すれいとまふ持ゆり

ふれはちよの悦ひを後ハ親毎よ行て二合ハりけ
 乞ふりま親の肉の福とてとて又親族とてとめ
 組合の人も憐れを助け一ハは十日ああり強
 るく父乃痛ひいえよ今あ母の長次郎をいひくも
 してかのまふとやめとせ父乃心残もやとんて
 んとといひ並れとてのまふもあけまはか及とく
 るけけらと清を麻をさつらめ村人のいひくして金二
 二分利をさつらに貸あつて半れをやそ母の才と
 賤ひ一胡乃奉るといふよ改めぬ又とのうり方ハ金さ
 なたよるげとて父の必き暑の服をあつて

孝義録

三十三

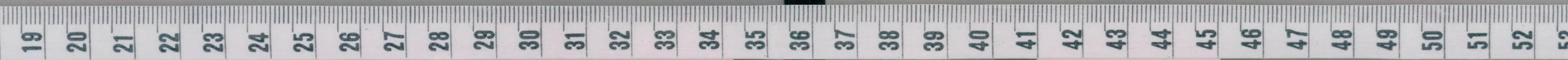


この組合の後八つとつゝの湯く焼くとの通り畑を賃
 地よ入合を分武来と得く古き孫入と茶枵つ買
 むめて久を那よかしてきりこして又のくは正月
 に至り父のあまらち酒をわくわをれと外一の酒
 うふ價もあるのされとうく是どとく借得る孫
 入賃物とるく九百錢を得て酒の料ととま後又
 食物も多く多れは彼等物をも費代りてその
 費とるくぬくしてその年七月よ病り父痲病と
 あやとまれば久を那屋夜をいとほ何れとん
 を用む汚らひくも物濯ぬ時どのの衣を父より

とせせき男ハ裸才あてそ扱る父切妻といふ物を
 好とけきと更よ一錢のくくもあければ家の
 かしこよありきるみく人乃垣をふあらし新とま
 て二十四錢よか入慈音町よりおめとてきむこのよ
 く意進よりくれおけきハ寛政二年七月小領主
 より来びあさへくを孝めと費くさ

孝行者六郎玄清

六郎玄清ハ秩父郡之沢村よとてさるも二反九畝
 あありもとる百姓あり父精玄清ハこころ九十との齡
 平かさ孫生るの去年よりこのころ老おけく者



とくも父母の心よき人なる人のあるはもあらざるも
もりのも善く人の心よき人なる人あり親の心
よき人もあらんといふてとあらぬ様もといふ
へまの心よき人なりて孝の徳をもちて
の貞とていふと一村の徳といふは領主とて
えて寛政三年七月の支度来るところに賞あり

○上総國

○忠義者 中代官支配所 市原郡好時村

奇特者 同支配所 長柄郡南九ヶ村

孝行者 黒田郡松領分 久留里城下市場町

孝行者 松平大和守領分 望陀郡長野村

孝行者 同領 望陀郡平山村

孝行者 水野日向守領分 武射郡和田村

○孝行者 稲葉播磨守領分 望陀郡木更津村

百姓次郎去法下男

醫者

町人信十郎後家

百姓

百姓

百姓

水吞

市玄漢 宝永二年 濟慶英

弓削宗庵 寛政六年 濟慶英

進人 明和二年 慶英

清九郎 宝曆十二年 慶英

要助 天明八年 慶英

孫之助 寛政三年 慶英

長玄忠 寛政三年 慶英



○孝行者 同頃

孝行者 濱邊喜右衛門知行所
塩生郡下永吉村

奇特者 同知行所
塩生郡下永吉村

孝行者 酒井彦人知行所
市原郡本心村

孝行者 竹田吉十郎知行所
長柄郡和泉村

奇特者 安友大和守知行所
園座郡大塚村

奇特者 水野善右衛門知行所
市原郡田尾村

○孝行者 有泉太郎友兼知行所
長柄郡下永吉村

孝行者 如壽院普賢妻本伏後守与力共給地
坐院郡河原井村

長吉

長吉 二十六歳 同時

長吉 四十二歳 寛政七年

傳吉 五十四歳 寛政七年

文彦 二十四歳 寛政五年

安左衛門 五十一歳 寛政三年

友右衛門 五十一歳 天明八年

孫右衛門 二十歳 寛政三年

大工 三十八歳 寛政三年

甚八 四十歳 寛政七年



ろく、主の罪ゆるさずん事と祈へ父と種さす方、
 郎といふと、喜ひしおや、室、此二年より、あてを、
 祈へ我、あ、い、る、罪、と、蒙、るとも、主、人の、罪、と、ゆる、
 せ、あ、く、と、ひ、く、と、ら、う、の、歎、ら、せ、し、ら、い、な、い、も、あ、
 り、な、く、あ、の、次、郎、を、流、し、た、つ、と、る、田、畑、を、
 く、く、市、を、流、し、た、く、あ、の、方、を、郎、と、い、ふ、の、
 父、の、罪、よ、う、の、く、追、放、せ、ら、る、と、い、ふ、も、
 年、二、月、に、あ、の、沙、汰、あ、り、し、の、市、を、流、し、
 の、も、と、る、田、畑、を、流、し、た、の、れ、よ、あ、
 方、の、郎、よ、う、の、く、あ、の、ら、ん、事、と、
 か、い、その、む、し、こ、こ、え、よ、う、の、
 宅、地、と、あ、り、せ、く、あ、の、
 三、番、よ、う、の、
 こ、ろ、に、
 孝、行、者、長、三、郎
 孝、行、者、長、三、郎

長三郎、長吉、兄弟、中、の、
 長三郎、の、
 の、の、
 ら、か、り、て、
 孝、行、者、長、三、郎



小孝のいふとけて朝夕の食料ゆるをわけそのふ
 ひよふらうらふ事あつてもらうのりさもいぬ百餘
 年いりるくつての富いして世にいとむらうの
 ゆいもあらぬい見の目一和の和泉屋源三郎とい
 ふものよつらとていふとめいふて母をまひいしに
 入るやとくく一暇をりて思ひくせり高い
 て外らのぬれいりらに家とていひつら母のあを
 とらひそのぬの腰くつて二使のいひも入る
 ちよまつらぬれいふついもやあらんくせり
 家の内あつてもらうのあよ使をきつらひ武を
 大使をよようけて小見をあらふうことくく武の神
 社佛寺のあつて又湯のつらんるといへ見きた
 うのい背おひゆいさきとてぬの左右よ添添
 てあつらうらむむ寛政と年領主らの寝美
 して根をらうくとあふふ

孝行者のうり

かつ長柄下茂系村の百姓長吉の娘あり父は七十
 八歳子らの居屋あつぬ子あつらうの持て外子田と
 てもあつてあつらう妻はあつて死してつ
 娘と二人あつらうせり先の年親族のちういひ



小宣加の程もあつたありとてまつら本郷とて
出せりと地味もその毒も免てとつら此着服よ
せしこかん

下總國

奇特者

比代官支配所
香取郡佐原村

奇特者

同支配所

奇特者

同支配所
近峯郡深敷村

奇特者

同支配所
結城郡恩后村

○孝行者

同支配所
結城郡上山川村

孝行者

同支配所
相馬郡泉村官拜

孝行者

一攝政領命
結城郡堤本村

百姓

永沢次右衛門

五十八歳

寶曆八年

次所在馬牌

永沢次右衛門

二十三歳

明和三年

名主

小倉清

二十歳

明和八年

名主

山川又三郎

五十六歳

寛政五年

百姓忠左馬牌

金六

四十七歳

寛政七年

百姓

勘左衛門

七十一歳

寛政八年

百姓元在馬牌

多々

五十歳

寛政三年

孝行者

松田相模守領分
何藩那瀬戸村

組

云々

寛政二年
慶長

孝行者

土井大炊師領分
葛飾那取渡町

町人

源吉郎

安永二年
慶長

奇特者

同領
葛飾那取中田那田村

名主

年七郎

天明七年
慶長

奇特者

同領
古河城下一町目

町人家持孫

孫八

寛政三年
慶長

忠義者

久世陸奥守領分
同省城下基町下納谷

百姓

忠七

寶曆十一年
慶長

孝行者

同領
猿崎那栗山村

百姓小玄湯娘

云々

寛政元年
慶長

孝行者

同領
猿崎那久作村

百姓才之儀妻

忠人

寛政元年
慶長

孝行者

同領
猿崎那坂崎村

百姓忠存出二

云々

寛政元年
慶長

農業出籍

水野日向守領分
結城那武井村

百姓

幸八

天明五年
慶長

○奇特者

同領
結城城下本郷大町

開發方名主

栗橋七郎

天明六年
慶長

農業出籍

同領
結城城下本口永根町

百姓

八左衛門

天明六年
慶長

孝行者

同領
結城城下本口西宮町

百姓

幸吉

天明六年
慶長

孝行者

同領
結城城下本口大町

開發方名主

栗橋七郎

天明七年
慶長

農業出籍

同領
結城城下本郷那治町

百姓六郎玄湯妻

世

寛政三年
慶長

孝行者

同領
結城那五助村

百姓

差右衛門

寛政四年
慶長

奇特者

井上筑後守領分
相馬那戸那村

名主

差右衛門

天明四年
慶長

孝行者

同領 香取郡後山村

百姓

伊三清

寛政二年

孝行者

同領 柏馬郡戸路村

百姓 彦左衛門

己三

寛政二年

孝行者

同領 松平右京亮領分 海上郡荒井村

組頭

為五郎

寛政二年

孝行者

同領 海上郡荒井村

大工

利七

寛政二年

孝行者

同領 海上郡荒井村

湯釜

次右衛門

寛政二年

孝行者

同領 海上郡荒井村

百姓

与七

寛政二年

孝行者

同領 海上郡長隊村

百姓 重田百姓持七郎

与七

寛政二年

奇特者

同領 海上郡今宮村

百姓

与七

寛政二年

奇特者

同領 海上郡今宮村

百姓

孫三清

寛政二年

奇特者

同領 海上郡今宮村

百姓

四郎左衛門

寛政二年

孝行者

本多伯耆守領分 葛飾郡菟心村

百姓

友三清

明和二年

孝行者

同領 同領

黄糸忠貞

新三

同和

農業出産

同領 葛飾郡取戸村

百姓

孫右衛門

天明六年

孝行者

多摩丹波守領分 狹嶋郡大和田村

百姓 又三清

与三

寛政元年

奇特者

津田山城守知行所 香取郡依米村本宿組

百姓 三郎左衛門

伊三 勘解由

天明七年

孝行者

同領 香取郡依米村本宿組

水呑茂三郎

久七

寛政七年

孝行者

田知行所
寛政七
年

水春

新庄

二十七歳

寛政七
年

孝行者金六

金六ハ結城郡上山川村の百姓是左衛門の子あり母ハ六
六歳より寛政六年より父ハ七十七歳より天
明六年に眼を病みて志ある所の知事時より父の老
るるハ十五名を牛九斗ありありハ荒畑の
と多くして日つきの名九斗ありありハ耕
事とゆこれハ家食して母ハ陸奥真壁郡荒
井村の名主と云流るもよのを云くけると金六成
長よ志こころ母れ地をよあつとあけと十八歳乃
時長を熟りもらよいとして母よこうりて年とせん

事を以て明和四年より安永七年迄つゞく
 父母も老衰へしれいづる里より之の趣を以て
 之を云せん事と稱ひし其年の暮より自村乃
 岩丸集りよつて志をく家をこゝろよりか父の目
 志ありきれ八月のつらみナ宵に喉をぬらん
 事と云ひて天明八年よりつゞくそれより同村の
 百姓を云流りも又の慈眼寺のものを云せし父
 乃こゝろより老衰へしれ其の末乃事人もとらる
 ことより教より之の結全はるまゝ父母の事ひいあて
 好めるものい何よてもそのむじよりあつせとこと

あり甘酒を乞ふ時ハ一里を歩あり結嶽町より
 しての暮より寛政六年春より母乃病より
 之れハ慈眼寺に喉を以て目志あるの父と病あり
 母を介抱せしその年九月に母ハ死せり母を
 ありて後いよく父よりつゞく亦も出んといハ其
 背よれい又の事云はるけりとらる人涙を
 して子ともてらるものハらる全ハを云ふ
 こそ教へたる全ハ事とも指へりハ父母其
 事をいふ事と云ひて其をいふ事と
 農業よりして其の父をいふことと云ふも

とらうしそ親族村長とこのとらうむらにあつせし
 去来同必葛飾郡片田村乃字也といへるもの、傳
 やもめよて男子一人ありし、らゆとらうとらものこと
 らして四十六歳の時とらめとて妻とむらとらうし
 これも又とらう曾につらとらとて寛政七年五月に勘定
 租改小出大助に代官とら子支配せしとらことえよとら白
 八月に寝病とらとて娘とらあり父の生涯扶持も
 ありとらと

奇特者栗橋七郎去来

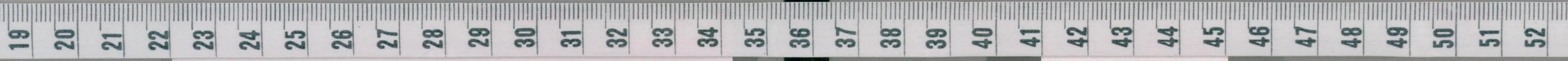
栗橋七郎去来、結城城下平谷大町のりあり、母乃
 名、王甚を奉つといへるものと、おつりて荒つる地を母に
 あはれく民を養ひし、かありしひもろく本とらも志
 せりゆとらとて、九新よおとせし、田と十町よあり、男女
 百七十人、家敷四十六軒、馬も十匹よとらとらとらと
 とあり、奇特あるものあり、家法とらとら親族よ睦く
 養ひとらとらとらと、去用の事とらとらと日、農業
 よ力とらとらとらとら高をもとらとて、家業とらとら
 せり、天明六年三月、領とらとら、寝病とらとて、苗字
 帯力とらとら、扶持業とあたへ、在後、方の事、お致と
 するせり、とらとら、養子とらとら、去来もあつ、父乃志とつて

荒地をひろく事どもとて父の樂といひて父
 乃憂といひ事入しといひ父もろろいひの氣あらはれし
 人のもつ子よりのりやえ多の夜去清ハ光の奉より
 高の名いもつとあ江戸あり同屋小入百ありといひ
 へし物とるせしに滞り事ありて身ととも賣し
 ろるしてその傍ひをあらんとといひしつ子の行状
 のよことありよ服して同屋も物せら物せのしてこの
 へらといへし事もあり妻のとりけいする時あり
 くれ醫者もといひけり父のいしりりもいしせ
 しといひせめく殺氣いふいひるいしる事もや

あらんとく空晒しれ粉と九業とく神佛も祈り
 ていへしよ枝くまといし事もありといひ父より
 来る杖持米いしり用とるここと奉くふ困ひ並て人
 よのいあしへ天明と奉浅野山やまし時貧民支食
 に多しといひけりいし物と質物いし入食とすあ
 こあして救ひふ成生とて事いし事ありといひ
 のを救ふといひ食をもたくいへ並つ子にめつりふの
 をあまれと病をたよと老人のふりり童あまのいし
 あつり高ひの名教しり天明七年九月領主より
 田宗帯カといひし杖持米といひし事發方名主

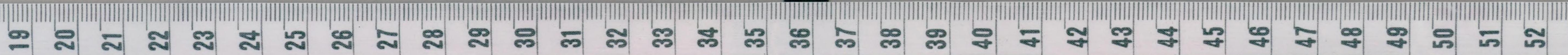
孝義録

三十九



孝義録卷之七

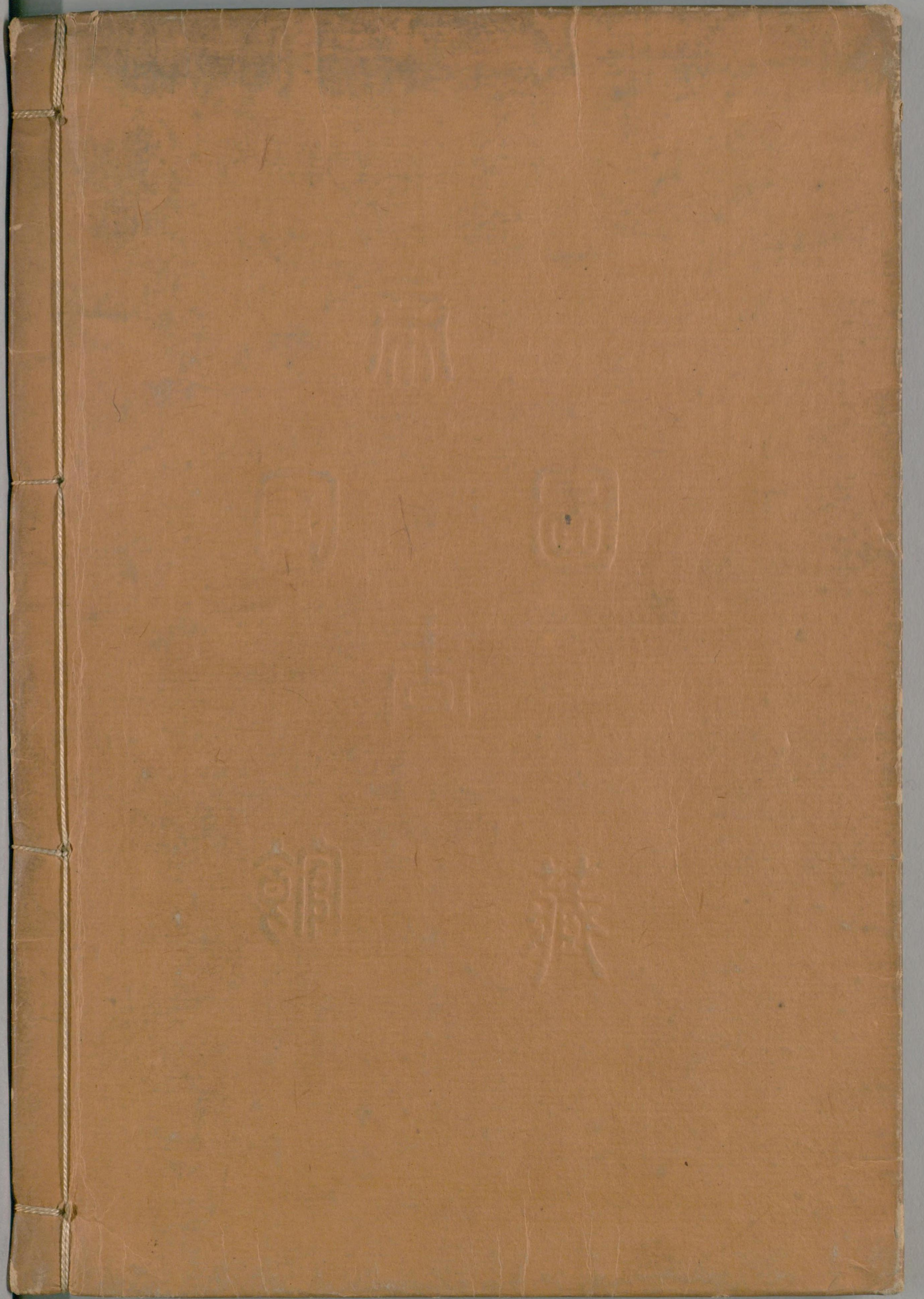
Handwritten text in vertical columns, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is written in a cursive style and is mostly illegible due to fading and bleed-through.



136
50
197

国立国会図書館 タイトル『孝義録』 請求記号 136-197

ガラス使用



国立国会図書館 タイトル『孝義録』 請求記号 136-197

ガラス使用